
突然のファンタジー

ぺこりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突然のファンタジー

【Nコード】

N3570I

【作者名】

ぺこりん

【あらすじ】

目が覚めたら、異世界だった。

そして綺麗な巫女さんに勇者だと決め付けられ、俺は右往左往。
はたして俺はどうすれば？

001 それはない！

目が覚めたら綺麗な女の顔があった。

さらさらした長い黒髪に透き通るような白い肌、ぱっちりとした瞳にふっくらとした唇。

とりあえず、クラっとするほどの美人だ。

「お待ちしてりました。勇者様」

「……意味が」

「ですからお待ちしていたんです。勇者様を」

訳の分らない事を言われながら俺は起き上がって辺りを見回す。

辺りは真っ白な壁に覆われ、天井にはステンドグラスがはめ込まれており、色彩豊かな陽光が降り注いでいた。

教会？ かも思ったが、女の姿は巫女装束で違和感だらけだった。

まあ胸元のはだけてる辺りがとても気になるが。

何かのコスプレ会場だろうか？

「えっと、此処は何処だ？」

「此処はエクレア祭殿の儀式の間でございます」

「……何処だよそれ？」

「えっとですね。ミューズ王国の中央辺りでしょうか？」

「日本ですよね？」

「そうですね、勇者様は日本という世界からいらしたんですね。いくら美人でも、軽く小突こうかと思う。」

「とりあえず勇者じゃないから」

「いえ、貴方様は勇者様ですよ！」

「根拠は？」

「私が此処で異世界から召喚しました」

「はあ、何かお前は此処が異世界で、魔物とかいて剣や魔法とかで倒す世界とでも？」

「そうですよ」

あっけらかんと当然の様に言いやがった。

いくらなんでも馬鹿にし過ぎだと思っただが？

「あっそ！ なら、見せてくれよ。ま・ほ・う！」

すると巫女は俺の胸元にとてもステキな微笑をこぼしながら手の平を置いた。

何故だろうか？ 俺の中で警報を鳴らすように、心臓が早鐘を打ち始める。

俺はこのキチガイ女に惚れてしまったんだろうか？

「歯、食いしばってくださいね」

悪寒悪感悪意恐怖！ 全てを俺は感じ取った。

「え、つちよ！ つぶ！！！」

待つてという間もなく俺の胸元で何かが弾けた。

酷い圧迫感と共に俺の身体は浮遊感に苛まれ、馬鹿みたいな速度で飛んでいく。不意に背中に分厚い感触を感じたが、どうやらそれも突き抜ける。すると真つ青な空が顔を出した。

それから俺はようやく地面に付いて1回転2回転3回転して止まった。

これだけ吹っ飛ばされたというのに、痛みはほとんどなく俺はただ震えていた。

視界に浮かぶ空は青く、太陽はさんさんと世界を照らす。そしていくつもの中世ヨーロッパ、ばい白い建物が浮いていた。

「理解していただけたか？」

悪魔な巫女さんの透明度のある麗しい声色が俺の耳に届く。

ほとんど無意識に……「ええ」と答えたと思う。

001 それはない！（後書き）

はじめまして、ぺこりんと申します。

及ばない部分が多々あると思いますが、最後まで読んでくださった方ありがとうございます。

このお話は今後ともこのような路線で話は進んでいくと思います。多分そんな感じですよ。

後書きとか正直何書いて良いのかわからないので、以上で失礼します。

目の前には随分と煌びやかな光景が広がっていた。

入り口から中央奥、金の装飾がされた玉座まで伸びる真赤な絨毯。周りには高価そうな美術品が並び、あちらこちらには無骨な鎧を着た兵士が並んでいた。

玉座には立派な髭を生やし豪華な冠を被った爺さんが座っており、その目は一国の王であることを主張するかのように鋭い。

どうもこの国の文化体系は俺の居た世界で言う。和洋折衷？ に近いようだ。例えばそれは兵士の帯剣しているのが日本刀であったり、王様が玉座で正座している事だったり……。

どう考えても椅子の上で正座する意味は分らないが。

「勇者様をお連れいたしました」

隣でかしく巫女服の少女プラムは言った。

このプラムだが、本人いわくややこしい魔法は苦手らしい。例えばそれは治癒魔法だったり、補助魔法だったりする。というか使えるのは攻撃系の魔法、しかも魔力をそのままぶつけるような系統だけらしい。

「ようこそ勇者殿」

王様の声に俺は頭をたれる。

ではプラムがどうやって俺を異世界からこちらに放り込んだかという。次元の裂け目に魔法力をぶつけてこじ開け、腕を突っ込んで引っ張り出したらしい。

本来ならば然るべき準備と術式を持って、やるべきことらしいのだが。

（そんな面倒な事は出来ませんよ？）

ということ俺は文字通り力づくで召喚されたらしい。

「今わが国、いやこの世界では大量の魔物が出現し」

なにやら王の横にいた大臣が現状の説明を始めた。

そんな力づく、もといいい邪道で召喚された俺にはある種の後遺症が残った。

それは日常生活においては、差ほど支障がある事ではないのだが、まあ、気になるといえば気になる部分で、大切といえば大切なものなのだが……。

「世界は未曾有の危機に瀕しておるのだ」

「ふむふむ」

偉そうな大臣の話は長く、ありきたりっぽい話なのであまり聴く気にもなれない。が、相槌だけはとりあえずうっておく。

それで結局後遺症のことなのだけど。

「して勇者殿のお名前は」

「……分りません」

俺がプラムの事を横目で睨むと彼女は肩を竦ませて見せた。

「つと、言いますと？」

「それは私から、勇者様は召喚のさいに強くを頭をお打ちになられたようので、記憶を無くされておいでなのです」

流暢な声音で彼女は言うとお小さく舌を出した。

うん、やっぱりいつか泣かそう。

どうもそういう訳で、俺の主に関わる記憶が綺麗さっぱりと、忘却されてしまったのであった。

002 後遺症（後書き）

という訳で第二話になります。

超展開過ぎやしないかと思いつながら書いております。

ちなみに絶賛主人公の名前を募集していません！

別に名前思いつかなかったから記憶喪失の設定にしたんじゃない
んだからね！！！！

そんなこんなで最後まで読んでくださった方、ありがとうございます
ました。

ぺこりんですた。

「しっかし俺が勇者ねえ」

あの玉座のある部屋から出ると俺は思わず呟いた。

「無理もないかもしれませんが、勇者様は勇者ですよ」

そう言ってプラムが微笑む。

瞬間、数時間前に彼女に吹き飛ばされた光景が過ぎり「っひ！」
と思わず俺は後退りした。

「どうかなさいましたか？」

不思議そうに彼女は小首を傾げる。

「い、いや何でもないよ」

「そうですか？」

俺は激しく頭を上下に振った。

それを訝しがりながらも彼女は真っ白な廊下を歩き始めた。

数時間前、俺は彼女に吹き飛ばされた。正直、あれは車に突っ込まれたのと同じくらいの衝撃が、有ったんじゃないかと思う。怪我一つ負わなかったのが不思議なくらいだ。

魔法だったんだから仕方ないのかもしれない。

けれどどう見たって十七八くらいの少女に、華奢で細腕のそんな子に俺は気後れしている。そんな俺が勇者何て大層なものだとは思えなかった。

「やっぱなんかの間違いだろ」

溜息混じりのその言葉はプラムには届かなかったのか、俺達は無言で長い廊下を歩く。

真っ白な石畳の床に白の壁、そこに取り付けられた燭台は銀色で、それが等間隔にいくつも並ぶ。陽光の入ってくるガラスすら嵌められていない窓は、何処までも続く空の青を垣間見せる。たまに見える中に浮かぶ建物もまた白く、何処か雲のように見えた。

その光景は自分自身の記憶が曖昧な俺でも、幻想的だと思えるほ

どに見慣れないものだった。

「勇者様？」

どうやら俺は何時の間にか歩くのを忘れていたらしい。ずいぶんと遠くにいるプラムが足早に近づいてくる。

「どうかなさったんですか？ 勇者様」

「いやつい珍しくて」

プラムも視線をゆっくりと窓の外へと移す。

「やっぱり珍しいですよ。この世界でも空の上にある国は此処だけですから」

「……………はあ!？」

「何ですか、騒々しい」

両手で耳を抑えつつ彼女は言った。

「いやだって、空の上って!？ ことも浮いてるのか!？」

思いつきり俺は足元を指差し声を荒げた。

「そうですけど？」

正直標高の高い場所、山頂にでも立っているとはかり思っていた。俺は思わず窓から乗り出し眼下を見下ろす。そこには幾つもの雲とその間から覗く海の青、そして茶色の大地が顔を出していた。

「大丈夫ですか？ 勇者様、お顔が青いですよ」

冷たい風が胸の内側を撫でるような感触、それと酸素が急に薄くなったような気がした。

「落ちないよな？」

「何がですか？」

「この国！」

プラムは一瞬まじまじと俺の方を見て、それから盛大に笑った。

「あはははは、何ですかそれ！ 落ちるわけ無いじゃないですか！ 今までと打って変わった歳相応の表情に俺は一瞬呆気に取られ、反論するのも忘れて立ち尽くした。

「本当に何言ってるんですか？ 落ちるような場所に人が住んでいるわけ無いじゃないですか！ あはは」

「ばっか、何言ってるんだよ！ 万が一ってこともあるだろうが！！」
「ないない。ありえないですよ勇者様！ ははは」
しばらくプラムは笑い続けた。

003 空（後書き）

こんにちわ、ペコリンです。

まだプロログですので、あまり書くこと無いので意気込みを書きます。

実はあまり何も考えずに書いております。

行き会ったりばったりです！

猪突猛進です！

でも毎日書いて行こうと思います。

よろしく願います。

であ、失礼しました。

「すみません！ 大変失礼しました勇者様！！！」

真つ黒な長い髪が揺れる。プラムの白い肌はほんのり赤らみ、そのおどおどした様子は非常に俺の加虐心を煽る。

「今更大丈夫だよ。すでに俺は君に吹っ飛ばされてるしね」
わざとらしく自分の胸元に手を置き顔をしかめる。

「ち、違っんです！ あれは緊張してて、ちよつと加減を間違えたというか、思いつきり力を込めちゃっただけで」

「へえ、俺は攻撃系統の魔法しか使えなかったとしか、あの時間いてないけど？」

「だ、だって私にだって色々面子つてものがあって……」

そこまで言っつてプラムは俯いてしまう。

「そんなの勇者様には関係ないですよね」

「まあ、関係ないわな」

このプラムという少女がこの国でどういう立場にいるのか俺には分らない。ただ、それでも俺の知識で言わせれば、ゲームの話ではあるが勇者を召喚する人間ってのは、それなりにお偉いさんなわけだ。

そんな大役をこんな少女がやっていると思うと、あまり想像はしたくない。

「その、すみません、取り乱してしまって」

深々と彼女は頭を下げる。

そこで小突いてやった。

「っわ！」

慌てて彼女は頭を抑えた。

「取り乱しとけ、取り繕ったところで俺には堅苦しいだけだ」

「勇者様？」

プラムの頭が上がる。

垂れた髪をかき上げると、身長差のせいで彼女の上目遣いの状態の瞳と目が合った。

こういうのは苦手だ、目を逸らしたくなる。

案の定、俺はほどなくしてそっぽ向いて頭を掻いた。

「必要以上に気を使う必要はないってことだよ」

窓から入り込む日差しは暖かく、空は何処までも青い。

とても平和そうな世界、未曾有の危機なんて本当にあるのだろうかと思ってしまう。

この時間が長く続くことを、願わずにはられない。

「クス、はい、勇者様がお望みなら」

「そうしてくれ」

「はい、勇者様」

「……………」

何かが引つかかった。

「どうかしました?」

何だろうか、非常に落ち着かなくなる。

「勇者様?」

「そ・れ・だ!」

「はい?」

「勇者様っていうの辞めないか?」

「はあ? じゃあ勇者さんとお呼びしましょうか?」

うわ、気色悪!

「勇者事態辞めよう!」

「でも、勇者さんは勇者ですし」

「いや、やっぱり俺勇者じゃないし!」

「いえ、絶対勇者です!」

ちよつとムツとしたようにプラムの眉間に皺がよる。

嫌な情景が頭を過ぎる。

「分った! 一万五千歩くらい譲って俺が勇者だとしよう!」

「だから勇者なんですって」

「まあそれは良いとして、せめて呼び方くらい変えられないか？」

「え、でも勇者を勇者意外にどう呼びすれば？」

「いや、ほら本名とかあるじゃん……」

どうも俺は自分が記憶喪失だということを、忘れがちのようだ。実際記憶喪失になって困っていないから、認識が薄いのだろうけど。

「あの、ごめんなさい」

プラムが非常に申し訳なさそうに謝った。

「いや、別に気にしてないから、大丈夫だよ」

俺は辺りを見回す。

ちよっと安易だけど、これで良いか。

「クラウド、これからはそう呼んでくれ」

004 クラウド（後書き）

こんにちはペコリンです。

ようやく主人公の名前が決まりました。

どっかのRPGで似たような名前があったような？ 無かったような……

うん気にせず行こう！

石畳の床、隅っこにはベットではなく布団が引かれている。中央には小さなテーブルが置かれ、その周りには座布団らしきものがある。

「此处で今日、ゆう、クラウドさんには寝泊りしていただきます」
まだプラムは俺の呼び名に慣れないようで、度々言い直す。

「しつつかし、まあ豪華な事で」

部屋の調度品はどれもこれも、ちよつと普通に使うには勿体無く見える。

「クラウドさんが何を言ったところで、勇者様ですしね」

「まあ、そういうことらしいな」

この部屋に来るまでに何人かの人間にあつた。その誰もが好奇の目で俺を見て、人によつては『この世界を救ってください』などと言ってくる。

俺はボタンと布団に倒れこみ、大きな溜息を吐いた。

「疲れました？」

少しごわごわした布団、それでも十分に心地が良い。

「そうだね。疲れたかも」

「ゆっくり休みください。夕食の時間には起こしに参りますから」

「ありがとうございます」

プラムは軽く頭を横に振ってから、部屋を出て行った。

もう一度俺は息を吐いて、目を閉じた。

部屋は耳鳴りがしそうなほど静かで、広く感じた。布団に潜り込んでるっていうのに何処か寒く、俺は包まるように寝返りをうつた。勇者、空に浮いた国、魔物、魔法。

それらは何処か現実感が無くて、いまいちピンとこない。記憶が無いからなのかもしれないが、それでも俺が元いた世界は違つ物だつた気がする。

ゆっくりと目蓋を上げる。

贅沢に細工された天井、それは酷く美しく近寄りがたい。

「そういうことか」

此処には何一つ自分の物がなく、自分の知っている事が少な過ぎる。だから現実感が無い。

「はあ、本当いきなりゲームの中にぶち込まれた感じだな」

コンコンッと扉がノックされて俺は常体を起こした。

「勇者様いらっしやいますか？」

聞いたことの無い男の声。

「ああ、カギなら多分開いてるんじゃないか？」

無雑作に扉は開く。

すると赤黒い液体が部屋へと入り込み始める。おもわず俺は立ち上がり後退った。

重々しい鎧を纏った身長二メートルはあるんじゃないかという、大男が部屋へと入ってくる。

不敵な笑みを浮かべ、赤黒い血液を垂らす長剣を携えて、深紅の瞳を俺に向けた。

「糞汚らしい人間どもの中での潜入調査ってことで滅入ってたんだが、まさか勇者を殺れるなんてなあ」

心臓を鷲掴みされたような感触、手足が震えているのが分る。

男は楽しむようにゆっくりと近づいてくる。それに合わせて俺は距離を、取れなかった。三步も後退しないうちに背中に硬い壁が当たる。

「くくく、逃げ場は無いぜ？ 勇者様」

俺は大きく息を吸って吐き出す。

そして一歩前へ出る。

「おいおい、仮にも俺は勇者だぜ？ ビビらせやがって、一人かよ」
武器は無い。盾も無い。鎧も無い。

今、俺にあるのは勇者という肩書きだけ、このブラフを通じなければ……

変な奴

赤目の男はゆっくりと長剣を振り上げた。

俺は一步も引かずに、相手を睨みつける。

心臓は早鐘を打ち、頭では警鐘が鳴り響いていた。

「足が震えてるぜ？ 勇者様よおお！！！」

長剣が振り下ろされる。

精一杯のブラフは少しの時間を稼げず、足の震えの所為か俺は一步も動けない。

振り下ろされる筈の長剣は、まだ降りて来ない。

走馬灯とかいうやつだろうか？

音は消え、視界は何処か他人事の用にゆっくりと動いている。身体からは力が抜けて膝が折れ、俺はゆっくりと倒れていく。

このまま何も出来ずに死ぬのか、やっぱ勇者なんて俺には似合わないよな。

……

……

……

長剣が、振り下ろされない。

「勇者にしては根性が無いのお」

丸太のような太い腕が長剣を持つ手を掴み上げ、赤目の男を宙吊り状態にしていた。

まるで巨人の様に思えてしまうほどの体躯に褐色の肌、逆立つ短髪赤毛の男が悠然と立っていた。

状況を理解できていなかったのか赤目の男は、隻眼を大きく開き動けずにいる。

「まあ威勢は悪くないようじゃが」

大男は値踏みするかのように俺を眺める。

まだ早鐘を打つ心臓の所為か、息苦しくて起き上がることも出来

ない。

正直、助かったという安堵感で、余計に力が抜けてしまいしばらく立てそうにない。

「は、放しやがれ！」

ようやく状況を理解したのか、赤目の男が動き出す。

「ふむ、では、放してやるか」

大男は赤目の男を、投げた。

冗談みたいな怪力だ。

対して力を入れてる様子もないのに、赤目の男は壁に衝突して、潰れた。

「全く、ここの警備もなつとらんのお」

大して困ってもいない表情で言いながら、大男は俺に手を差し出す。

あまりに大きく握りつぶされてしまっんじゃないかと、恐る恐るその手を掴んだ。

その手は暑苦しいくらいに暖かで、力強い。

「助かったよ。ありがとう」

「ほお？」

大男は不思議な物でも見るように沈黙する。

「どうかしたか？」

「いや、もっと早く助けるとでも怒鳴るものかと思っていたのでお」

何言っただこいつ？

「何だそのお偉いさん？」

「勇者であろう？」

「確かに、そう呼ばれてるな」

「お偉いさんであろう？」

「お前、変な奴だな。誰だろうと助けてもらったらありがとうって言うたろ？」

大男は両腕を組しばらくの沈黙の後、人懐っこそうな笑みで言う

た。

「お前、変な奴じゃな」

「お前がな！！！」

ゲイツ

あれから数分もしないうちに、何人かの兵士がやって来て俺は部屋を移る事になった。

赤目の男から俺を助けた、大男はゲイツといい一応警備兵の隊長の一人らしい。

先ほどの部屋と大差ない部屋、ただし内側にゲイツ、ドアの向こうと廊下に兵士を数人という大仰な警備になったらしい。

とはいえゲイツ事態は湯飲みでお茶を啜りながら、くつろいでいるので緊張感はない。

「それで勇者殿、さっきのやからなんだがのぉ」

「クラウドで良い」

ゲイツは腕を組み一瞬考えるそぶりを見せて言った。

「で、勇者殿」

「いや、クラウドで良いから!」

「どうもあれは魔族だったらしいぞ。勇者殿」

全く呼び方を変える気はないらしい。

「魔族ねえ?」

「うむ、故に近日中に魔王軍が此処に攻めて来るであろう」

事も無げに言うと、ゲイツはお茶を飲み干す。

へえ、魔王軍が攻めて来るんだあ。

「……はあ!? 魔王軍!?!」

「何だ大臣から聞いてないのか?」

まあ、そういうのがいてもおかしくないか。

「大臣の話はほとんどまとも聞いてなかったからなあ」

「ふむ、魔物魔族を束ねる魔王の軍団でなあ。人類の敵じゃな」

ゲイツは緩慢な動作で急須からお茶を入れる。

あの大きな手でそれらを動かすのはなんとも器用に見える。

「それにしては随分と落ち着いてるんだな」

「此処だけじゃろつなあ」

「此処だけ？」

「うむ、今ごろ上は大騒ぎじゃろつて、頼みの綱の勇者殿が役に立ちそうにないからのお」

それはそうだ、先ほどの話はきちんと報告されているだろう。

俺自身、何かの役に立つとは思えない。

「ある程度の情報は規制されているじゃろつから、そこまでの混乱することはないじゃろつが」

一息ゲイツは置くと、重々しく口を開く。

「このミューズ王国は空に浮かぶ天然の要塞、故に外敵と呼べるほどんどいなくてのう。」

わしが言うのもなんじゃが、軍力はさして強くない」

「つまり、魔王軍に攻められたらこの国は落ちるってことか」

「おそろくのお」

「冗談だろ？」

「冗談ならわしも楽なんじゃがなあ」

ゲイツの表情には先ほどまでの余裕はなく、その巨体からは威圧感すら感じる。

情けないことに、自分の身体が震えだしてるのが分る。

考えるまでもない。

魔王軍が来れば俺は死ぬ。

もしかしたら鬨り殺しにされるかもしれない。

「でのお、勇者殿。逃げろ」

何を言っているのか解らなかった。

「何言ってるんだ？」

「なんじゃ、勇者殿は耳が悪いのかのお？ 逃げろと言ったんじゃ」

「いや、でも」

「勇者殿は何かの役に立つとも思ってるんじゃあるまいのお？」

正直きつい一言だった。

おそらく俺は剣を握った事もない。

魔法なんて使えない。

何の力もない。

「役立たずだろうな」

ゲイツは首肯する。

「それにこの国を守るのはこの国の人々であり、この世界を守るのもこの世界の人々じゃと、わしは思うんじゃ」

確かにその通りだ。

正直言えば、いきなり召喚されて貴方は勇者だとか言われ、私達を助けてくださいとか、いい迷惑このうえない。

「だから勇者殿は逃げる。」

こっちの都合で呼んでしまった拳句、死なせてしまったらご先祖様に申し訳が立たぬゆえのお」

そう言っつてニカつとゲイツは笑う。

ああ、本当その通りだ。

こいつらのことなんて放って置いて、逃げるのが一番良いに違いない。

うん、絶対間違いない。

なのに俺はいつの間にか握り締めた拳を解く事が、出来ずにいた。

確信の理由

「クラウドさん」

ノックすらすることなくプラムが入ってくる。

長い黒髪は乱れて肩が上下している、随分急いで来たんだろう。

「おう」

「良い所に来たのお、嬢ちゃん」

俺とゲイツは座ったまま視線だけをプラムの方へと向ける。

「ゲイツさん？」

「先ほど勇者殿の護衛を仰せつかったのお」

「それで、襲われたって聞きましたけど」

「うん、まあゲイツのお陰で助かった」

それを聞くと「大丈夫なんですネ」と言っつて、プラムはすたと腰を落とす。

するとゲイツは彼が持つとほとんど玩具に見える急須で、お茶を入れるとプラムの前にすつと置いた。

「それでなあ嬢ちゃん話があるんじゃがお」

「なんですか？ それと嬢ちゃんはやめてください」

絶対呼び方変えないよな。

「勇者殿を逃がそうと思う」

プラムの瞳が見開く。

「明日勇者選定の儀が行なわれるであろう。その後、北東の転移の間から」

「嫌です」

ゲイツが言い終わるより早くプラムは言った。

「クラウドさんは勇者様ですよ？ 何で逃げなくちゃいけないんですか？」

プラムには似合わないくらいの強い口調に、ゲイツも俺も息を飲んだ。

「一緒に戦っていたらダメです」

「報告は受けているんじゃない？ この者に戦う事などできんよ」

「そんなことありません！」

大きくゲイツが息を吐く。

「この者を殺す気か？」

その通りだと思う。ゲイツの言うことは多分間違いない。

でも、何でかプラムの言葉が自分でも判らないけれど嬉しい。

「勇者様は死んだりしません！」

「……嬢ちゃんは本当にこの者が勇者だと思うのか？」

プラムは一呼吸置いて言った。

「間違いない。クラウドさんは勇者です」

真っ直ぐ過ぎるほどに力強いプラムの瞳。

何でそんな目が出るんだらう？

何でそんな信じられるんだらう？

「何故言い切れる？ 確かにこの者を召喚したのは嬢ちゃんだが」

ゲイツは腕を組み数秒逡巡する。

「召喚の仕方は滅茶苦茶で、その時の記憶はあやふやだと聞いている

んじゃない？

それに間違いはないかのお？」

「そうですね？」

質問の意図が判らないというように、小首を傾げた。

『じゃあどうして俺が勇者だって言い切れるんだ（じゃ）？』

同時に俺とゲイツは言った。

今、思えばプラムの俺が勇者だということには、異様な執着があった様な気がする。いや執着というよりは確信だったのかもしれない。けれど、それは俺を召喚した張本人だからだと思ってたが、その時の記憶があやふやとなると、いったい何を根拠に彼女は俺を勇者だと言っていたんだらう。

「うーん」

彼女は黒く長い髪を掻き上げ、何か思いついたかのようにパンと

両手を合わせた。
「女の感かな」

確信の理由（後書き）

こんにちわペコリンです。

そろそろ、まともなバトルシーンの一つや二つ書きたいなあ、なんて思っています。

多分そろそろだよね。きっとそろそろだよ。
全然自信ないやあ。

まあ、きっちり書いてけばその内ですよね。

此処まで読んでくださった方、ありがとうございます。
日々頑張つて更新していきます！
それでは失礼します。

戦うこと、逃げること

俺とゲイツは顔を見合わせた。

女の勘ってなんだ？

意味が分らない。そんなもので断言出来てしまうものなのか？

「がはははは」

ゲイツが笑い出す。

「まさか勘とはのお、がははは」

周りを憚ることなく本当に愉快そうに大声をあげる。

見ればプラムは不満そうに目を細める。

「別にちゃんとした理由はあるんだから、勘ってというのが言葉として一番しっくりくるだけなんですからね」

それは何というか反論なんだろうか？ とても言い訳がましく聞こえるのだけど。

「いやのお、嬢ちゃん。巫女様の勘なら十分に理由になるぞ、がはは」

こっちはこっちでフォローなのか馬鹿にしてるのか、いまいち分らない言動だ。

「前々から思ってたんですけど！ 本当に巫女に対する物言いじゃないですよね!？」

「だいたい何時まで経っても名前じゃ呼んでくれないし、筋肉馬鹿ですか!？」

「なんか滅茶苦茶だな。」

喚き散らすプラムは活き活きしていて、非常に楽しそうだ。

「別に構わんじやる？ 困る事でもなかるう？」

「いえ困ります。上下関係はきちんとして頂かないと周りの人に」

「そういうの嬢ちゃんは嫌いじやる？」

「っな！」

あっけらかんにゲイツが言つと、プラムは口籠もり目を逸らした。

「それでも私には巫女というたち」

「すまし顔は似合わんぞ？」

本当この人は思ったことそのまま言ってるんじゃないか？
ただこれには同意なので「確かに」とだけ俺は答えた。

「クラウドさんまで！」

プラムがわなわなと震えている。

ちよつと怖い。

「プラムは取り繕ってない方が良く。さっきも言っただろ」

苦笑交じりにそう言つと、何故かプラムは俯いてしまう。

それを興味深そうにはゲイツは眺め、にんまりする。

本当このおっさんは謎だ。

いつの間にか結構な時間が経ったのか、窓からは夕日の茜色が入り込む。それが良く磨かれた石畳で反射して、部屋全体を赤らめていた。

「さて、勇者殿はどうするんじゃない？」

ゲイツは言った。

逃げるか戦うか？

頭じゃ逃げた方が良くいつて分っている。本当に何もできないだろうから、下手をすれば周りにすら迷惑をかけるかもしれない。

それくらい俺は弱い。

「俺は……」

それでも言いよんどんでしまう。

ゲイツは大きく息を吸って吐くと、今まで一番真剣な表情で言った。

「ふむ、逃亡の準備だけは根回しておいてやろう。時間は多くは無いがゆっくり考えれば良いじゃろ。

ただし、ちゃんと覚悟するんじゃないぞ？

戦うなら自分の命を、逃げるならお前さんを信じている者を裏切る事をの

そう言つと一瞬だけ視線をプラムに向け、立ち上がった。

「腹、減ったのお」

この人は本当どこまでが確信犯なんだろうか？
きつつい選択肢投げやがって。

「お節介なおっさんだな」

大男が人懐っこい笑みを見せる。

それは夕日で赤らんだ部屋の所為か普段よりも一層暖かく感じた。

睨み合い

あの後、俺達はほどなくして解散した。

ゲイツは食堂へ、プラムと俺は自室で夕食を食べる事になった。

本来なら勇者様の歓迎会みたいなものが開かれるはずだったのだが、あの魔族の襲撃で安全の為に中止となったらしい。

もう辺りは随分と暗く、気温も随分と下がってきたように感じる。俺は布団の中に入ったまま眠れずにいた。

頭の中では何時までもゲイツの言葉が反復される。

『戦うなら自分の命を、逃げるならお前さんを信じている者を裏切る事をの』

ただ戦うにしても逃げるにしても、おそらく俺はこの国と魔王軍に対して戦力的影響与えられない。それだけなら自分の命を守るべきなのかもしれない。

『信じている者を裏切る覚悟をの』

あの時ゲイツは最後にプラムを見た。でもあれは彼女一人を指したわけじゃない。この国で俺を勇者だと信じている全ての人に裏切り者だと思われる覚悟だ。

でもその人達って何だ？

俺を勝手に勇者だと信じて期待して勝手に裏切られたと想う。

迷惑だ。酷く迷惑だ。迷惑な連中だ。

それはプラムだってそうだ。

勝手に俺を召喚して勇者に仕立て上げて、今度は戦わせようとしている。

そう考えると、とんでもない女だ。

こんな奴等の為に俺が死ぬ必要なんてない。

戦う必要なんてない！

……

……

……
俺は起き上がりドアの前まで行く。

そこには壁を背にして座り込んでいる大男がいる。

「おっさん起きてるか？」

「どうした勇者殿？」

「プラムに逢いたい」

ゲイツは怪訝そうな表情を浮かべてから、ゆっくりと起き上がった。

「こんな時間にかのお？」

「ああ、決めに行く」

両腕を組、ゲイツはしばらく逡巡してから口を開いた。

「……分った」

俺達は部屋を出る。

何人かの兵士が何事かといった様子でこっちを見てくるが、話し掛けては来ない。

昼間見た職台には明かりが灯り、暗闇を等間隔で照らしていた。

いくつかの角を曲がり階段を上がり、長い廊下を歩いていくと何人かの兵士が立っていた。

「ゲイツか、何のようだ？」

少し高めの声、女性だろうか？

自分より幾分か小柄な兵士だが、当りが暗く表情を見る事は出
来ない。

「勇者殿が嬢ちゃんに会いたいというのでのお」

「今何時だと思ってる？」

あのゲイツの体格に気後れする事も無く、小柄な兵士は声を荒げ
る。

「悪いけど大事話なんだ。取り次いで貰えないか？」

それで俺がいる事に始めて気付いたのか、兵士は俺を何か値踏み
するようにこっちを見る。そして何を思ったのか、俺の耳元まで顔
を近づけて言った。

顔ちけえ。

「あんたが勇者か？ さつさと逃げなくて良いのかい？」

腰抜け野郎と言うように切れ長の鋭い眼と小さな口が意地の悪い笑みを浮かべる。

その顔は少女のようであるが男にも見えなくも無い、中性的な顔立ちだった。

「それを決めるために来たんだ」

彼女？ の眉間に皺がよる。切れ長の目は釣り上がり、口はきゅつと結ばれる。それから胸元を掴まれ、視線を同じ高さ辺りまで引き下げられる。

普通に怖い。

ただ昔にも、こういうことがあつた様な気がする。

確か、こういう時は目を逸らしたら負けなんだ。

逸らしかけた瞳を息を止めて無理やりに固定する。四肢にはそこから動かないように精一杯の力入れる。そうして俺はこいつの目を見返す。

しばしの沈黙、段々と彼女？ は俺を引っ張りあげるように胸元を掴んだ手の力を増していく。

それでも俺は目を逸らさない。

「カイ、そのくらいで良いじゃろ？」

ほとんど宙吊り状態になったところでゲイツのおっさんが言った。俺の胸元を掴んでいた手を乱暴にカイは離す。

「良いよ。取り次いでやる」

偉そうに言つて俺に背を向けると言った。

「お前、身体鍛えた方が良いぞ」

余計なお世話だ！

夜話

あれから、数分もしないうちにカイという兵士がプラムに取り次ぎ、俺は部屋に入ることになった。

狭い通路を進み、布で区切られたような場所で俺達は足を止めた。

「プラム様、勇者様をお連れしました」

「ど、どうぞ」

緊張しているのか、プラムの声は歯切れが悪い。

カイは慣れた手つきで部屋を区切っている布をゆっくりと開ける。それから入れ、というように視線だけで俺に合図をした。

そそくさと中に入ると、そこにはある種の別世界が広がっていた。壁には何らかの壁画描かれ、天井にすらもそうついた細工がなされていいる。明かりは何なんだろうか？ 炎の様に揺らめく白く淡い光が、数箇所灯っている。

「プラム様、私は外で待機していますので、何かありましたらお呼びください」

後方からの声に思わず振り返ると、ほとんど睨み合いの時とか変わらぬ形相のカイの顔があった。

俺は苦笑いを返す。

な、何もしませんよ？

「クラウドさん？」

カーテン付きのベッド？ にプラムは腰掛けていた。

昼間とは違う白い薄布の浴衣を羽織っている。しかしそれを絞める為の帯が何故か絞められていないので、彼女の柔肌、特に胸元辺りの露出が目玉に毒というか何というか。

「……凄い格好だな」

プラムは浴衣を羽織り直すようにして、先ほどよりきつめに身体に巻きつける。

「勝手に見ないでください」

なんて無茶な事を言ってるんだ。

「まあ、こんな時間に訪問する俺が悪いか」

「そうですね。こんな時間に来るなんて、失礼ですよ」
ぷいっと彼女はそっぽを向く。

「それで、話してなんですか？」

「なんて言ったら良いのかな？」

俺はどう話していいものかと、頭を搔く。

それから何秒か逡巡してから言った。

「プラムはどうして俺を勇者だと思っ？」

「俺は異世界から人を召喚する技法がどういったものかは知らないけど、何らかの理由で俺が選ばれたんだろ？」

「プラムは何も言わず何かを考えるように俯く。」

「だから俺は更に言葉を連ねていく。」

「けど少なくとも俺には自分に何らかの力があるなんて思えない。」

実際、君に魔法で吹っ飛ばされたり、魔族に殺されかけた。

それでも君は俺のことを勇者だと疑わない。それどころか戦って欲しいとまで言っている。

「どうしてだ？」

「女の勘とかじゃ、ダメですよね？」

「申し訳なさに彼女は言った。」

「ダメだな」

大きな溜息でも吐いたのか、薄明かりの中で彼女の肩大きく動く。

「少し、長くなりますけど良いですか？」

俺はゆっくりと床に腰を降ろし、胡座あぐらをかく。

そしてプラムは語り始めた。

夜話（後書き）

こんばんはペコリンです。

こうやって一応毎日欠かさず？

更新をして一番大変なのが、実はサブタイトルだったりします。短い内容に題名を付ける。そのうち確実にネタ切れしそうです……。うーん、話数というか数字だけのがシンプルで良いかもしれないですよね。

むしろ長くなってくると数字がないと整理しにくそうになって、今更ながら思い始めました。

そのうち修正しますかねえ……

そんなこんなで、さようならサヨウナラさようなら

二人

私は幼い頃から、勇者様を召喚する為の巫女として、育てられてきました。

簡単に言つとこれが全てですね。

.....

だから根拠なんて無いんですよ。

自分で言うのもアレですけど特殊な人間なんですよね、私。

身体的とか精神的にっつてことじゃないんですけど、環境的に特殊だったんです。

うーん、でも今じゃ身体的にも精神的にも特殊？ 子供の時はっつてことにしましょう。

っつて、言つても生まれる前から私のやるべき事が決まっていただけなんですけどね。

勇者様を召喚する為に、生まれ育てられ生かされてきた。

だから普通の人だったら手に入れたものを私は手に入れられなかった。きつとそれ以上の物を手に入れてきたんじゃないですかね。

でも、辛くなかったかって言われると否定はできません。それでも周りに必要にされてるっつて思うと、気にならなくなっただんですよ。人より不自由だけど優遇されているのはそういうことだと思いますから。

それに必要だっつて思われてることが嬉しかったし、同時に自分に与えられた役目がそれだけ大切なことだっつて誇らしく思えました。

ただその逆に酷い強迫観念も持つ事になったんですけどね。

私には勇者様を召喚することが全てで、それが出来なければ私に価値は無くなって、皆が離れていっつてしまふ。

実際、それが私の全てなんですよね。

だからこれで勇者様を召喚できてなかったら、私は何の為に生きていたのか分らなくなっっちゃいます。

クラウドさんが勇者じゃないと困ります

そんな話を相槌を打ちながら俺は聞いた。

何故かどうしようもなく胸糞悪い。

俯いている為に表情は彼女の表情は伺えない。

「プラムはこれからどうするんだ？」

彼女は長い黒髪を掻き上げて、顔をあげる。その表情は質問の意図を理解しているとは到底思えない。

気付いていないんだろうか？ 勇者を召喚できていようとしないと、この国の人達にとってはもうお前は用済みってことになるんだぞ？

「これからって？」

小首を傾げ、不思議そうに問う。

その瞳は無邪気な子供の様相を見せ、俺の心配なんて全く分っていないようだ。

小さな溜息を吐く。

俺が勇者だって確証は無いけれど、プラムの根拠が分ったただけでも良しと……

……

……

……

「つくつく、あははは」

「く、クラウドさん!?!」

これが笑えずにいられるだろうか？

頭で逃げた方が良くといくら思ってもその選択をできなかった。その理由がこんなくだらないものだとは思わなかった。

本当に馬鹿馬鹿しい。

「はははははは」

心配になったのかプラムはベッドから腰を上げる。後方でも布の
摩れる音がして、カイさんが入ってくるのが分る。

プラムの羽織っていた薄布の浴衣がはだける。

あれ？ 何だこれ？

薄明かりの中でさえ白いと思えるほど、彼女の素肌が露出する。

光の当り加減の所為で女性特有の部分の陰影がはつきり浮かび上が
り、たなびく長い髪が踊るように揺れる。

この時点で俺には笑う余裕はもう無くて、ただただ魅入ってしまった。
っていた。

首筋あたりに衝撃が走る。

視界はブラックアウトした。

覚悟

翌朝、俺は自室の布団の中で目を醒ました。

見慣れない真っ白な天井は余所余所しくて落ち着かないので、さつさと起き上がろうとする。

「つつ」

妙な首筋の痛みに俺は顔をしかめた。

何だこれ？ 昨夜はプラムの部屋に行き、話を聞いてその後どうしたんだっけ？

どうも思い出せない。

特にプラムの部屋から自室に戻った記憶は無い。

「お目覚めかの、勇者殿」

低く野太いゲイツの声が空気を揺らす。

片手を振って答え、今度はゆっくりと俺は起き上がった。

部屋には眩しいくらいの日差しが入り込み、外が晴れ渡っている事を伝える。

「おっさん、俺昨夜はプラムのところ行ったんだよな？」

ドアの前に鎮座した大男は欠伸をしながら言う。

「そうじゃのお、しかし何で気絶してたんじゃ？」

「気絶？ 俺は寝ちまったのかな？」

「そうなのか？ どうも昨夜のことは記憶が曖昧なんだよな」

「ふむ、眠かったんじゃろ」

「それもそうか」

やはり妙に首筋が痛くて擦った。

ゲイツがのっそりと起き上がる。

「決めたか」

普段とは違う強い口調でゲイツは言った。

真剣実を帯びた目は俺を貫くような強さを感じさせ、巨体を更に大きく見せる。

大きな体躯が優に身長2m以上あり、そのうえで鍛え上げられた肉体は人とは思えぬ怪力を、宿している事を伺わせる。普段人懐っこい笑みを浮かべているので、あまり気にならないが、改めて見ると背筋に嫌な汗が流れた。

おっさんの目から決して目を逸らさないように、俺は深呼吸する。何度も迷った。

それでも、もうこの答えに迷いは無い。

いや、多分プラムと同じように俺にはこれ以外にない。

「俺は戦う」

「何故だ？」

何故だかその口調は怒っているように聞こえた。

「俺には良くも悪くも記憶が無い。だから無いんだ。」

勇者として召喚されたなら、その役割をこなす意外に俺には目的が無いんだ」

ゲイツの表情が一際険しくなる。

「正直、逃げる方が良いとばかり思ってたんだけどな。」

俺はこの国意外にこの世界で知り合いがいないんだな。

逃げたところで、どうせほどなくして死ぬさ」

「そんな情性で戦われては困る」

その声は低く、憤りを感じずにいられない。

おそらく俺がプラムの話を聞いた時に感じた想いと、似たようなものをゲイツも感じているに違いない。

「諦めではないのか？ そんな理由で戦うなど、それこそ死ぬだけだぞ」

やっぱりこんな理由じゃ納得しないか。

俺はくしゃくしゃと頭を掻いた。

「仕方ないか」

本当、こういう本音を言うのは好きじゃないんだけどな。

そうして俺はゲイツに告げた。

覚悟（後書き）

投擲

朝食を取り終わった頃、プラムとカイがやってきた。

そして今日、行なわれる『勇者選定の儀』の説明が行なわれていた。

儀式事態は簡単なもので、祭殿の中央に突き刺さっている剣を引き抜けば良いというもの、選定というのも言葉だけで実際は勇者のお披露目らしい。

ただ気になるのはカイの鋭い眼光と。

「ということなので、速めに準備して置いて下さいね」

俺に言いながら全く目を合わそうとしないプラムの行動である。

「なんか今日はプラムおかしくないか？」

「そんなことはないですよ」

何故だか不釣合いなほどの満面の笑みを向けられた。不気味過ぎる。

「そうですか」

そう答えると今度は何故かカイさんの眼光が一層鋭くなる。

この威圧感、ある意味ゲイツのおっさんと良い勝負なんじゃないだろうか。

「そういえば勇者殿は何で昨夜気絶してたんかのお？」

プラムの肩がビクと震え、その顔を湯だったように赤らみ始める。

「そっぴい何でだ？」

「知りません！！！」

訳も分らず怒鳴られた、と同時にツヒュと言う空気を切り裂く音が耳元を駆け抜けていった。

恐る恐る振り向くと、壁には大きめのナイフが直角に突き刺さっていた。

「プラム様を辱めるような言動は、控えてもらおうか」

抑揚のない声で言うときカイさんは何事もなかったように、壁から

ナイフを引き抜く。

辱めるような言動ってなんだ！？ でも怖いから反論はしない。

「き、気をつけます」

「ふむ、勇者殿も災難じゃのお」

このおっさん非常に楽しそうに見えるのは気のせいだろうか。

しかし、あの小柄な身体からどうやってたらナイフが壁に突き刺さるほどの投擲が出来るんだ？ モーション見えなかったぞ。

カイは昨夜と違い兜を付けていない所為で、肩口にも届かない短い髪があらわになっているが、やはり中性的な顔立ちの為に性別を判別できない。身体的な特徴から見ても鎧を着ているが為に、小柄で細身という意外には判らないでいた。

「なんだ？」

視線に気付いたのかカイの切れ長の瞳が俺に向けられる。

「いや、カイは……」

ナイフの映像が浮かんで俺は口籠もった。

「どうした？」

「いや、何でもない」

カイは納得してないのか、しばらく俺を睨みつけると大きな溜息を吐いた。

「女だよ。たく、どいつこいつも俺を何だと思ってやがる」

でも、一人称俺なのか！

「すみません」

「全くクラウドさんは失礼ですよ。カイさんはこんな格好良い女の子なのに」

可愛いじゃないんか！

複雑そうな表情を浮かべるカイであった。

階段

無数の兵士が並ぶ祭殿へと進む通路を俺は歩いていた。

傍らにはゲイツが案内するように進む。

支柱だけが立ち並ぶ城外延は外壁がなく、四方は青い空が広がっていた。

正面には決して豪華とは言えないが、巨大な建造物が建っている。俺が召喚された場所、エクレア祭殿。その入り口は開け放たれていて、今だに扉には穴が空いていた。

本当、よく怪我一つしなかったもんだ。

祭殿内に入る。

天井のステンドグラスから入って来た明かりが、床に何かの文様を描いている。何かのシンボルだろうか？ 楕円形の中に剣のような物が描かれているが、いまいち輪郭がハッキリしないので判らない。

そこから更に奥へと行って、扉を開ける。

眩い陽光に俺は目蓋を閉じる。強風が流れ身体が揺れ、足取りがふらついた。

「勇者殿、あぶないであろう？」

「ああ、悪い」

どうやらゲイツが肩を抑えてくれたらしい。

ゆっくりと目蓋を上げる。

何処までも広がる青い空、それ以外なかった。

恐る恐る視線を下げる。

遠めに円錐型の真っ白な建物が見えた。

更に視線を下げる。

足元には三人が横並びで歩けるくらいの幅の階段があり、その端には何故か手すりどころか落下対策が何もされていない。

「気をつけるんじゃぞ」

舞い降りるモノ

薄闇の中を一步、踏み出す。

入り口は入った瞬間に口を閉じるように消え去り、周囲には青白い光が道しるべの様に現われた。

妙な空間だった。

灯りは辺りを照らしているはずなのに、視界には何も浮かび上がらない。地面すらも確かに感触があるのに闇一色で、平衡感覚を失ってしまいそうになる。物音一つなく、聖櫃のような静寂に耳鳴りが聞こえてきそうだった。まるで広大な暗闇に放り込まれたような感覚だった。

とにかく灯りを頼りに進む。

ほとんど一直線だと思っただが、暗すぎて方向感覚まで曖昧になってしまっている。

やがて灯りが円を描き、その中央に長い黒髪に透き通るような白い肌の小柄な女性が浮かび上がった。

「プラム？」

彼女は首肯して手を差し伸べ、俺は掴んだ。

明かりが差し込む、眩いばかりの光が辺りを照らす。逃れるように手を翳すが、あまりの眩しさに目蓋を下ろしそうになる。細目で視界を保つ、頭上には穴が空いていて、そこから溢れんばかりの陽光が入り込んできていた。

ゆっくりと視界が戻ってくる。

人が居た。百人くらいの人間が俺達を取り囲むように、上から見下ろしていた。

この円錐型の建物は、どうやら中は逆円錐形のような作りになっている。

「勇者様、さあ引き抜いてください」

プラムに諭され正面を向くと、闇の中では見えなかった剣が地面

に突き刺さっていた。

無骨で光沢の無い石のような剣、その柄に手を伸ばし掴んだ。

……………

「っふん！」

片手で精一杯の力で引き抜こうとするが、ビクともしない。仕方なく両手で掴み、自重も使って一気に引き抜こうと試みる。

「っふん！」

……………

……………

……………マジで抜けないんだが。

人々がどよめき始める。

プラムが耳元で「クラウドさん、ちゃんとやってくださいよ」とか言ってくる。

いやこれ本当、マジで抜けないんですけどお！

心の中でばやきながらも、渾身の力で剣を引っぱろうとして、勢い余って手が柄からすっぱ抜ける。

「いってえ」

見事に尻餅をつく、突然辺りが暗くなった。

頭上を仰ぎ見ると陽光が差し込んでいた穴が随分と小さく……………暗闇が煌いた。

誰かが俺に覆い被さって、視界は暗転して、それから腹辺りに又ルっとした感触がして。

「クラ、ウドさん、大……………丈夫ですか？」

「……………プラム？」

「良かった」

酷く苦しそうに彼女は微笑んだ。

ゆっくりとただゆっくりとプラムの目蓋が降りていく。

「おい、プラム？……………なんだこれ」

触れようと思って持ち上げた俺の手は真赤に染まっていて、その紅は滴り落ちて行く。

光が室内に戻っていく。

一つの影が降りてくる。

眩い陽光に照らされ、漆黒のコートを纏った男が降りてくる。

病的なまでに蒼白な顔、血の池のような淀んだ赤色の瞳、圧倒的な存在感を持って降りてくる。

さながら魔の王の如く、舞い降りた。

舞い降りるモノ（後書き）

こんにちわペコリンです。

さあ変なの出て来たし、テンション上げてくぞおおお！

なんて一人意気込んでおります。

全力で空回る作者、激しく読者置いて行くんじゃないかなかるうか？

そもそも今回のラストの文章、しつこいんじゃないかなかるうか？

それら全て置き去りにして、猪突猛進気味に駆け抜けていきますので、よろしくお願いします。

恐怖

「狩れ」

突き通った抑揚のない声音で、舞い降りてきた男は言った。

そのの意味することは数秒掛からないうちに訪れた。

最初はただ赤という認識しかなく、遅れて上がった恐怖と断末魔の音叉で理解した。

鮮血が、視界を覆わんばかりの血液が巻き散らされていることを。思えばおかしな話だった。

いくら城内に侵入しているとしても、勇者を単独で襲うような魔族などいるのだろうか？

例え居たとしても勇者の居る部屋まで、誰の助力もなしに来れただろうか？

答えは考えるまでもなく、ありえない。

奴等は待っていたに違いない。

さながら家の中で隠れながら繁殖していく害虫のように、家主が気付いた時には手遅れとなる、この瞬間を。

漆黒のコートを纏った男が一步踏み出す。

俺達を見ていた聴衆は赤色の瞳の魔物に成り代わった隣人に殴殺される。

血黙りの瞳の男が一步近づく。

心臓を掴まれているような感覚に指一つ動かせない。

蒼白の死相を被った顔が向かってくる。

俺に覆い被さったプラムの身体が冷めて逝く。

俺は戦うことを覚悟していた。けど違う。こんな、こんな一方的な戦いじゃない。せめて劣勢でも、まだ勝つ見込みのある戦いを見ていたんだ。こんな戦いともいえない状態の、戦いを覚悟なんて

していない。こんな理不尽な状態など想定していないんだ。
これは死だ。

俺の命を消すには圧倒的な死だ。他の誰であろうともこの死は圧倒的過ぎる。どうにも出来ない絶望的だ。

アレを見てはいけけない、そう本能的に解っている。

それなのに今もまだ目を背けられないのは何故だ？

俺は死を受け入れているのか？

もう距離は5mもない。

影が踊り出た。

逃げる！俺はそう言うべきだと思ったが言えなかった。

あまりにも影は悠然としていた。

全身鎧で包まれているとはいえ、俺よりも小柄なカイが余りにも堂々と男と対峙していたから。

「これ以上、プラム様を傷つけさせない」

二本のダガーを携えるその背中は何倍も大きく見え、言葉は嫌でも響いた。

辺りは血塗れで、誰かの雄叫びとも断末魔とも判らない絶叫が響く。

それでも男の温もりの欠片もない、抑揚のない声が室内を満たす。
「なら、動くな」

圧倒的な死に俺より小柄なカイは吹っ飛ばされた。

俺は覆い被さっていたプラムを横に寝かせる。

安心しきった子供みたいな顔で、彼女は目を瞑っていた。

酷い震えだ。

ガタガタと自分の足が馬鹿みたいに笑っているのが良く分る。これはさつきまで覆い被さっていた彼女が、震えを抑えてくれていたんじゃないかと思えた。

きつと、今俺は赤ん坊が始めて立ち上がるように、不恰好な姿を晒しているに違いない。

仕方ない、心底目の前にいる男が怖いものだからどうしようもない。

だけど目を逸らさない、こいつが俺の敵だから捕捉し続ける。

馬鹿な話だ最初から死ぬことなんて考慮してたのに、いざとなったらこのざまだ。死から逃げることばかり考えていた。

俺は戦う為に起き上げる。

プライド

情けない。

まだ身体は眼前の男を前にして震えている。俺ながら格好悪い。

俺は死ぬのが怖い。傷つけられることが怖い。痛みが怖い。

そして間違いなく俺は、敵に簡単に壊される。

だから、何だ？

あの時、俺はゲイツに本音を言った。

『俺を馬鹿みたいに信じてる奴の期待だけは裏切りたくない』

馬鹿みたいな覚悟、でも今だって変わっていない。

剣を抜けない俺を、庇って大怪我をしたプラムは言った。

『良かった』

今だって俺を勇者だつて信じてるに違いない。

俺よりも小柄なカイは見せてくれた。

『死に立ち向かう姿を』

だから俺はクラウドは、今の自分を我慢ならねええええよなああ

あああ！！！！

息を吸って吐く。

「ぶん殴る！」

啖呵を切って、踏み込む。

男が手の平を俺に向ける。

不景気な面を狙って、右手を振り被る。

男の手の平が禍禍しい光を放つ。

ありたっけの力で顔面を殴りつけた。

男が衝撃で後退った。

距離が開く。身体はまだ動く。何も考えずに踏み込む。

禍禍しい光が俺の胸元に飛び込む。

「おおおおお！」

拳を叩き付けるが、そこにはもう男は居ない。勢い余って蹈鞴を

踏む。

辺りを見回すが、男の姿はなく。聴衆を殺し尽くしたのか、隻眼の魔物が取り囲むように降りてくる。数は三十前後だろうか？ どちらにしろこんな数相手に出来るわけが無い。

不意に部屋に満ちていた陽光が消えた。

はっとして見上げる。

男が両の手を俺に向けていた。その周りに五つの真っ黒な球体があり、一つが陽光を遮っていた。

一つの球体が半軽一mほどあり、それら全てが自分を狙っているのだと思った。

蒼白な男の口元が三日月のように引き上がった。

指向性を持った闇が球体から俺に向けて放出された。

思わず目を閉じ、両手で自分を守るように防御姿勢を取る。多分、あまり意味はないけど、本能的に身体はそうに動いた。

.....

.....何も、起きなかった。

俺は五体満足で立っていた。

腕に痛みは無い。身体の何処も失われてはいない。闇が放出される前と何も変わらない。

ただ俺を取り囲もうとしていた隻眼の魔物が、消えていた。

「お前が、勇者か」

何一つ感情の籠っていないそうもない声で男は言って、自らの腰に手を回した。

コートと同色だったから気付かなかったのだろうか？ そこには剣の柄があった。

そして引き抜かれた。

真っ黒な刀身を持った日本刀が。

「死ね」

降って来る。

男が俺に向かって真っ直ぐに落ちて来る。

漆黒の弾丸の様な信じられない速度、分ることは俺にはもう何もできないということ、それほどまでに速い。

脳裏には自分が奴に切断されるイメージが、嫌というほど鮮明に映し出されている。

また本能的に両手が自分を守ろうとして、恐怖から目を閉じようとした。

その時、閃光が走った。

俺の頭上ギリギリを真っ白な閃光が駆け抜けた。

それが男に直撃して、削り合うようにして、目が眩むほどの光を放った。

視界が閉じた中で、聞き慣れた声が聞こえた。

「大丈夫ですか？ 勇者様」

逃亡

この世界で俺がもつとも多く聞いた声だった。

「プラム？」

彼女の声に間違いはない。

「この場は逃げましょう。勇者様」

焦りのない落ち着いた口調で言うと、彼女は俺の腕を掴んだ。引つ張られるままに俺は走り出し、やがて視界が戻る。

腰まで伸びた艶やかな黒髪、朱に染まった巫女服の後姿。

「大丈夫なのか？」

「ええ、もう完治いたしましたので、心配は無用です」

「そんな訳ないだろ！？」

あれは間違いなく重症であり、死んでいたっておかしくないはずだ。この短時間で完治するような物じゃないのは、俺にだってわかる。

「勇者様、プラムは言いませんでしたか？ 身体的にも精神的にも特殊だと」

彼女は振り向き、手の平を向ける。

先ほどの閃光が男にとつても目くらましになったのか、今だに先ほどの場所から動いてはいない。

ドン！ と音だけが響き、通路の天井が崩れる。

「これで少しは時間稼ぎになる筈です。勇者様、カイ様をお願いします」

数メートル先で倒れているカイに視線を向けて彼女は言うと、通路の壁面に手の平を押し当てる。

俺は言われるままにカイを背負って、倒れそうになる。

いくら女の子とはいえ鎧の重さは半端じゃない。

「勇者さま、出口まで運んで貰えれば良いので、お願いします」
それに首肯だけして、出来るだけ奥へと進む。

来た時と同じように青白い明かりが、方向を示す中進んでいく。ほどなくして何らかの作業を終えた彼女が追いつき、俺は口を開いた。

「お前、誰だ？」

「今はそんなこと気にしてる場合じゃ無いと思いますよ。勇者様」
きっぱり言うと彼女は前を歩き始め、やがて奥の壁面に小さな穴が空き、それが一気に広がった。

そして俺は息を飲んだ。

空は黒かった。

小さな角に背丈の倍はある羽を持った、子鬼が飛んでいた。

それも無数に青空を覆うというほどに、まるで羽虫の群れ様に舞っていた。

けれど、それに息を飲んだわけじゃない。

怪物が居たのだ。

真赤な巨人、それが本当に羽虫を相手にするかのようには、魔物をなぎ払っていた。

丸太のような太い腕で殴りつけ掴んでは叩き付け、蹂躪していた。

口元は笑みを作り、あたかも戦闘楽しんでるように見える。それだけで、その身体に付着した赤が全て返り血なのだという事に感じ取れる。圧倒的な暴力がそこにはあった。

それが当たり前前の様に臆することもなく彼女は言った。

「ゲイツ様、カイ様をお願いしますか？」

階段戦

「ほお、久しぶりじゃのおノーブル殿」

俺が背負っていたカイを脇に抱えながら、ゲイツは言った。

「本当にお久しぶりですね」

ノーブルと呼ばれたプラムに見える少女は答えながら、空に手を伸ばす。その先に居た羽の生えた小鬼のような魔物が、何かにぶつかつたように吹き飛ばす。

「多重人格？」

「そうではないんですが、さっきも言いましたけれど、申し訳ありませんが今は説明している時間は無いと思いますよ」

ざつと見ても、さっきみたいな魔物がこの辺りだけでも数十匹は浮いている。

確かに時間はなさそうだ。

「勇者様とゲイツ様は先に祭殿の方へ退避してください。あそこには魔物避けの結界もありますから、少しは落ち着けるはずですから」
「了解した。後ろはお任せしますぞ」

ゲイツがああ階段を上り始める。
慌てて俺がその後ろを追い始めると三匹の魔物が降下してくる。

二人が通るのがやつとの幅、落下対策の無いこの場所で吹っ飛ばされれば、間違いなく命は無い。

二匹がゲイツの左右から、襲い掛かるが丸太のような右腕が振るわれ一匹は潰れる。けれど左側からの攻撃はカイを抱えている為に、ゲイツにはどうしようもない。

「あぶない！」

気付いていないのかゲイツは何の抵抗もすることなく、魔物の攻撃を受けた。

魔物が、落ちていく。

………このおっさん何で出来てるんだ？

どうやら体当たりした魔物の方が、大きなダメージを貰ったようだ。

ゲイツの右腕が動く、それがバックブローのようにこちらへと飛んでくる。

突然のことに俺の身体は固まり、しゃがむ事すら出来ない。

強烈な拳の風圧が頭を掠めた。

「Gyalaal」

どうやら3匹目が俺の頭上に居たらしい。

「勇者殿注意するんじゃぞ、ワシも一人抱えて後方まで完全にカバーというのは難しいんでのお」

「お、おう」

と答えたものの俺に剣とかは無いので、せいぜい避けるくらいしか出来ないのだけど、正直それだって自信が無い。結局ゲイツから離れないペースで階段を歩くのが精一杯だ。

下りよりはましたが、やはりこの階段は出来ることなら利用したくないと心底思った。

ふと、数匹の魔物が落ちて行くのが見えて、振り向く。

少し放れた位置でプラムもといノーブルが、魔法らしき衝撃波を打ち出している。その頭上四メートルくらいだろうか、漆黒の球体が浮いていた。

「プラム！ 上だ！」

彼女が空を仰ぐ。

それとほぼ同時に球体から闇が放出されるが間一髪で彼女は走り出す。そうして射線から逃れるが闇が追ってくる。

「勇者様、申し訳ないんですが盾になっていただきます」

「え、はい!？」

彼女の後の階段は放出された闇で崩れていく、十分に破壊力があるらしい。

彼女は俺の服を掴み、引っ張り込むようにして体を入れ替える。俺のバランスは崩れ、何の抵抗をする間もなく闇に飲まれた。

無力化

そう思えるほどに視界は闇に遮られた。
けれど、それだけだ。

何の衝撃もなく闇は晴れて青空が覗く。恐る恐る眼下を見れば、階段が崩壊しているが為に、地上まで何も無い空間が広がっていた。「何でだ？」

思わずそんな言葉が零れた。

あの階段の材質が何かは解らないが、自分が無傷でいられる筈が無い物を、受けた筈だ。

「やっぱり勇者様は魔法を無力化できるみたいですね」
「待て、やっぱりって何だ！」

ノーブルは楽しそうに微笑むと、問いには答えず急かすように腕を引っ張る。だから俺は考える間もなく走り出した。

「そうか、なら串刺しにしてやるよ」
冷めた声、もう間違えることも無い、あの男の声が後ろか聞こえてくる。

ノーブルが振り向くと同時に階段の端により、先に行けとアイコンタクトだけで告げる。

エクレア祭殿まで後数メートル、けれど俺の脳裏にはたどり着く前に殺されるというイメージがこびり付く。

背後は見えない。全力で駆ける。それが今の自分にとっての最善なのだから。

先にたどり着いたゲイツが祭殿の扉を開け放つ、それを見て先ほどの闇の放出で散っていた魔物の群れが降下を始める。

不意に後方から目が眩むほどの光がこっちにまで届き、先ほどの円錐形の建物内で俺の頭上を通過した閃光が思い浮かんだ。

ゲイツのおっさんが降下してくる魔物を羽虫を扱うように、拳でたたき伏せていく。その中で一匹が俺に真っ直ぐに俺に向かって突

っ込んでくる。

避ける幅は無い。

拳を握り振りかぶる。

「おおお おおおお！」

フック気味のパンチは運良く相手の顔面に当り、魔物が落ちていく。

「や、りい」

歓喜にグッと拳を握った。

「その首、貰うぞ」

声の方へ振り向く。

漆黒のコートをはためかせ空を疾走する男が、刀を振りかぶっていた。

何でこいつが此処にいるんだ？

「避ける！」

大声量のゲイツの声に八つとして身体を仰け反らせる。

黒い刀身が横に走りだす。瞬間、何故か男の赤色の目が見開いた。

刃が馬鹿みたいな速度で俺の胸元を駆け抜け、男は重力に捕まっ
て落ちていく。

訳が解らなかった。

最初に感じたのは胸元の熱さで、次は酷い鈍痛がした。

胸に手を当てるとヌルっとした感触がして、見てみると真赤に染
まっていた。

・・・切られたのか・・・

気付いたら酷く冷えたような気がして、身体は震え出していた。

別にそうしようと思ったわけじゃないのに、視界が上に行つて真
っ暗になる。

遠くで誰かの声が聞こえた。

無力化（後書き）

こんにちわペコリンです。

とりあえずこの辺りで一度落ち着く筈……

自分で言うのもアレなんですが、訳が解らない。

一応、書いてる側は何がどうなっているか理解しているんですが、自分で読んでみても何がなんだかさっぱりだ。

まあ、主人公も何が起きてるか解ってないから、これで良いっちゃ良いんですけどね。

とりあえず四苦八苦しながら、次話から状況説明頑張ります！

飲み会

騒がしい。多分人の声だ。

思い出せないけれど、何処かで聴いた気がする。

橙色の薄明かりの下で、男女の集団がグラス片手にお喋りしているようだ。

そこから俺は大分放れた位置に座っているらしい。手元にはやや白みがかつた透明な液体の入ったグラス、それと空のジョッキが置かれていた。

「なぐう〜」

それはとても聞き慣れた呼びかけだった。

見れば集団の中から一人の女性が俺に手招きをしている。

不思議と俺がどうしようかと悩んでる間に、身体は頭を左右に振った。

そのショートトの髪を茶系で染め、肩紐のやや露出度の高い服を着ている女性が立ち上がり、こっちへ歩いてくる。

「それ、何飲んでるの？」

言うが早いか、彼女は俺のグラスを取るとそのまま口をつける。

けれど飲む寸前で表情が険しい物に変わった。

「しょっぱい！ 何これ？」

ようやっと俺はそれがソルティードッグだと思い至った。ウオツカとグレープフルーツのカクテルで、グラスの縁に塩が付いているのが特徴だ。

「で、何でそんなところで飲んでるの？」

確かに……

「ナグが良いなら良いけど、また寝不足なんじゃないの？」

なんだ？ 何の話だ？

「ふ〜ん、女の声で呼びかけられる夢ねえ。でも、ナグの夢には音声あるんだねえ」

俺は何も話していないのに、勝手に会話が続いていく。

不意に彼女はクスリと笑い、グラスを持った手で俺を指差して言った。

「溜まってんじゃない？」

待て、コラ！

「真っ暗？ 夢なのに映像ないの？ それ夢じゃなくて、幻聴なんじゃない？」

本当に何の話をしてるんだ？

「よしよし、お姉さんが素的なお薬が貰える病院を紹介してあげよう」

「意味わかんええええええよおお！！！！ ってえええええ！！！！」

俺は力の限り叫び、直後激痛に襲われた。

「勇者様？ 無理に起き上がっちゃダメですよ」

誰かとは似ても似つかない澄ました笑みを彼女浮かべる。

さっきのは夢か……

「勇者様ってことはノーブルの方だよな」

「そうですよ」

見れば、俺の胸元には白い包帯がぐるぐると巻かれていた。

辺りを見回すが彼女以外は見当たらない。そして場所はとうやらエクレア祭殿で、俺は長椅子に寝かされているようだ。

「あれからどのくらい経ったんだ？」

「30分くらいですね」

「はあ、本当情けない勇者だよな」

溜息を吐きながら言うと、ノーブルは目を瞬かせる。

「ご謙遜ですか？」

「いや、切られて気を失うなんて十分格好悪いだろ。仮にも勇者なのに一撃だぜ」

「ですが、あんな強力な魔法を無力化してたじゃないですか」

「俺は何もしてないけど？」

「何もしてないって……」

彼女は何か考え込んでいる様子で、しばしの沈黙が流れた。

「あの勇者様って魔法を信じてないですよね？」

「信じるも何も、目の前で見せられたら信じるしかないんじゃないか？」

「そう、ですね。言い方を変えます。」

おそらく勇者様は魔法で起きている現象は、魔法に見えるだけであつて、魔法だとは思ってないんじゃないですか？」

つまり俺は魔法に見える現象を、トリックだと思ってるってことか？

そもそもアレを理解しようなんて思っていない気がするんだが？
だからある種そのまま疑問も浮かべずに受け入れている。

いや、これは理解できないから思考停止して、拒否しているとも取れるか。

「確かに魔法だとは思っていないかもしれない」

魔法

例えば魔法が火だったり水が何も無いところか出てくる物だとしてよう。

それを見て最初から信じる人がもし居たなら、その人は随分夢見がちな子供だろう。更に言えば、常識的でない現象が起きた場合、僕等は何よりも最初に呆気にとられるんじゃないだろうか？

信じられない、ありえない、と誰もが拒絶する。もくしは見たままを受け入れて、調べもしないで適当な理由を付けて、思考停止という安全地帯へと逃げ込む。このどちらも魔法を無力化する原因だったらしい。

ノーブルが言うには魔法は個人の意思一つで扱える物で、呪文なども必要なく、頭の中で何をどうするかイメージするだけで使えるらしい。

ちなみに俺が「呪文とか必要ないんですか？」と聞いたところ。『……勇者様は、相手に自分が次に何をすか教えてさしあげてから攻撃するんですか？』

酷く疲れた様子で彼女は答えしてくれた。

更には手の平を相手に向ける行為も、人によっては必要ないらしい。つまり本当に意思一つで魔法は発動出来るもので、その指向はイメージによって形付けられる。ただし、意思にしてもイメージにしても強固なものでなければ魔法の発生に至ることは出来ない。けれど、その為に魔法の知識がまるでない人間にも魔法は使える。

異世界から突然召喚された俺であろうと魔法を使う事が可能であり、そして無自覚だとしても魔法を発動させることができる。

「つまりはあの男の魔法を無効化した力が俺の魔法だったと？」

「おそらく、そういうことなのでしょうね」

そう言って説明し終えた彼女は前髪を掻き上げる。

この間30分ほどだろうか？ 外では嘘でも静かとは言い難い爆

発音が、何度も聞こえている。

「さつきから気になってるんだが、あの音は何なんだ？」

「魔王軍か騎士団の魔法のぶつかい合いじゃないでしょうか？」

ドアに空いた穴から外を見れば、紅蓮の焰が城を取り巻き始めていた。

「こんなのんびりしている場合じゃなかったんじゃないのか？」

ノーブルは不思議そうに首を傾げる。その彼女の服は俺が寝ている間に着替えたのか、折り目一つない巫女服になっていた。

もう大量の出血をしていたということすら思い出すのが困難なほどに、真つ白な布地が清楚感を出している。あれだつて普通なら死んでいても、おかしくないんじゃないだろうか？

「のんびりなんてしていませんよ？　ちゃんとゲイツ様とカイ様が逃げる準備をしてくださっています。」

それに説明をしたのは暇だからとかじゃありませんよ。これからの行動に必要なと感じたから説明したんです」

あれ？　今なんて言った？

「……逃げる？」

「ええ、この国は滅びますから祭殿の結界が壊される前に、逃げる算段を付けないと全滅します」

「え、ちよつと待てよ。お前は……プラムはこの国を守る為に俺を召喚したんじゃないのか？」

そつだ彼女は言った。

ゲイツが俺に逃げる事を持ちかけたてきた時に言ったはずだ。

「違います。少なくとも、私はこの世界を救ってもらつた為にお呼びしたんです」

真つ直ぐな瞳でノーブルは言った。

「でも、プラムは一緒に戦つてと俺に言ったはずだ。

あれはこの国の為になつて戦つて欲しいつて意図じゃなかったのか？」

戦いの結果

「そうでしょうね。プラムは嫌がるでしょうね」

「だったら、俺たち……」

「勇者様」

ノーブルが俺の言葉を断ち切る。

ドーン！ とまた、外で何かの轟音が響いた。

「貴方に何が出来るんですか？」

ただ事実突きつけるだけの一切労わりのない言葉だった。

「相手を殴りつける事は出来るでしょう。」

魔法を無効化することも出来るでしょう。

それで？ 何が出来ます？」

「それでって」

「あの男を倒せるんですか？」

返す言葉がない。

俺はアイツを殴った。

けれど、それは効いていたか？ いや、俺の拳が空を切らなかつただけだ。

アレは偶然とか運でどうにかできる相手じゃない。

「守れますか？ 少なくともあの時、勇者様とプラムを見ていた人々は死に絶えました」

「……死んだ？」

「ええ、あの人達はもう二度と目を醒ます事はないでしょう」

思い出される鮮血のイメージに急に身体が震えだす。

ああ、そうだ皆死んだんだ。

あの時、俺は何をしていた。

ただ床に横たえ、それからアイツをぶん殴って、プラムと逃げて

……

彼らは何を思って死んだ？

戦いの結果（後書き）

こんにちはペコリンです。

なんとというか申し開きも何もできないのですが……

3日？ 4日ぶりの投稿になるのかな。

すみませんでした。

以上です。

勇者宣言

大地にっつて何を言ってるんだ？

「随分大胆な手に出てきましたね。」

けれどこの国を落とすよりも、落下させる方が楽なのは確かです」

落下？ 高い所から落ちること。

そんな理解をしたただけで、それはあふれ出て来た。

『いやだって、空の上って！？ ここも浮いてるのか！？』

『そうですけど？』 『落ちないよな？』 『何がです？』 『この国！』

『あはははは、何ですかそれ！ 落ちるわけ無いじゃないですか！』

この後、俺は『ばっか、何言ってるんだよ！ 万が一ってこともあるだろうが！！』と言っつて、彼女はそれが当たり前の事のように信じきつて『ないない。ありえないですよ勇者様！』そう笑い飛ばした。

止めないと。

でも、そんなこと俺に出来るのか？

一歩が踏み出せない。

無力な自分とこの国を落下させたくないという葛藤が頭を回る。

「ゲイツ様、準備の方はどうですか？」

「それが、まだしばらく掛かりそうなので。奴等、空間ゲートを重点的に攻めてるようなので。」

「逃がす気は無いつてことでしょうね」

「今、カイが他のゲートを見に行っておるが、おそらく強行突破するしかないじやろう」

ゲイツとノーブルが話を進め、逃げる算段がつけられていく。

不意に思った。

プラムがいたらと。

そしたら呆気なくらい、あっさりと足が進んだ。目の前の二人の間を抜け、教会の外へと向かう。

随分大きな手に腕が掴まれた。

「待て待て、何処に行くんじや？」

「止める」

振り向きもせずには俺は答え、力の限り掴まれた腕を振り解こうとする。けれど、しっかりと掴まれた腕はびくともしない。

「落ち着くんじや」

「放せ！」

「だいたいどうやって止める!？」

「知るか！ 奴等全員殴り殺せば止まるんじやねえの！」

無茶苦茶だ。自分でも解っている。でも、他に思いつかない。

「何故、貴方はこの国を守ろうとするのですか？ 異世界の来訪者様」

ああ、もうノーブルの中では俺は勇者じゃないらしい。

けれど、そんなことはどうでも良い。

「貴方には関係ないことでしょ？ この国がどうなるうと」

彼女の声には敬いとか優しさは乗っていない。これはただの怒声だ。

「この女の為にですか？」

ノーブルが自身の胸に手をつけてプラムを指す。

「惚れたんですか？ そんな一時の気の迷いで、貴方は死ぬ気ですか？」

無意識に苦笑が漏れた。

随分粗悪な冗談だ。

「はは、俺はそんなんじやねえよ」

「だったら……」

「ねえんだよ！」

叫んだ。頭が空っぽになるほど、全力で。

俺達に選択肢は無かった。

プラムも俺も、決められた道を歩く以外を許されていなかった。生まれた時から”勇者を召喚すること”を義務付けられた彼女。

突然見知らぬ世界に放り出され、”勇者に成れ”と言われた俺。
選択肢というものが、もしあるとするならそれは”死か望まれた
ままに生きるか”だった。

「俺に選択肢があるのか？ 勇者になるか死ぬか以外にあるのか！？
俺はこの世界のことを何も知らない。この世界で、一人で何かをす
るなんて到底出来るとも思えない。

そんな俺に他の選択肢があるのか！？」

視界がぼやけ頬を何か伝っていく。

俺は何も見っていない。ただ想いをぶちまけていた。

「それでも俺は万民の勇者になどなつてやらない！ 誰が、俺の知
らない奴等を、俺を知らない有象無象の奴等なんぞ助けるか！？

俺は実際の俺を知っていて、それでも馬鹿みたいに信じている奴だ
けの勇者になる！！！」

合格

荒い息が漏れる。

身体も心も揺れていた。

召喚された時から不安だった。

だけど現実には俺にそんなことを自覚する間もくれなかった。

山積みの問題、急変して行く状況、それら全てが頭を覆っていた。

昨夜、俺はプラムの話聞いて胸糞悪くなり、そして笑った。

彼女の理不尽な環境が許せなかったから苛立った。

そして俺もまた彼女同様に理不尽な環境に立っていることに、今更に気付いたから笑った。

『頭で逃げた方が良いと、いくら思ってもその選択をできなかった理由』

それはあまりにもくだらない。

俺には魔王軍と戦うという理不尽な環境しか用意されていなかった。

ぼやけた視界に誰かが立った。

俺は目を乱暴に拭い邪魔な涙を払い除けると、そこには鎧を来た小柄な少女がいた。

「カイ？」

疑問を投げるように彼女の名前をゲイツが呼んだ。

けれどカイはそちらには目もくれず、鋭い眼差しで俺を見ていた。

「決まったか、勇者」

昨夜と同じように俺は決して、目を逸らさないように彼女と睨み合う。

そして選ぶしかない道を、自分から踏み出す為に言った。

「戦う」

「なら、行くぞ」

カイは付いて来いと言うように背を向け、それに続くように俺は

足を踏み出す。

「貴方はプラムが居なくても、戦えるんですか？」

消え入るようなノーブルの声が、耳を抉った。

「まさか生きているとも思っているんですか？」

腹部に又ルつとした感触がした。

真赤な手の平が蘇る、冷えた体温を肌が思い出す。

「私はプラムじゃないんです」

ああ、また身体が震えだす。

「貴方を勇者だと信じて、庇って彼女は死にました。

貴方を信じてる人なんて、もう居ないかも知れませんか？」

死が、ありありと身体に刻まれていた。

震えた唇を無理やりに動かし、荒くなる呼吸にも構わずに答えた。

「プラムは俺を庇って、良かった、と言ったんだ」

ろくに力の入らない身体を動かし、振り向く。

そして、西洋風の教会には似つかわしくもない、巫女装束を着たプ

ラムそっくりの顔の彼女に、言い放った。

「なお更、戦うしかないだろ」

ノーブルは大きく息を吐き出した。

それから準備運動をするように首を回し、両手を上げ背伸びをした。

「本当、似合わないことすると肩とか懲りますよね」

訳の分らない世間話みたいな独り言をノーブルは言った。

どうしてこういう状態になるのか俺には理解出来ないまま、世界は進んで行くらしい。

「合格ですか？」

「ええ、大分頼りないですけど」

ゲイツが穏やかな笑みを携えて聞き、やや不満そうにノーブルは答える。

先ほどとは打って変わった穏やかな雰囲気には俺は付いて行けず、ただただ棒立ちする。

「なら早くしろノーブル、時間は無いんだ」

場の空気を絞めるようにカイは呟く。

それに対してノーブルは首肯すると、ツカツカと早足で俺に近づいてくる。

「えっと、どういう状況ですか？」

全く理解できない中、後退りしたくなるほどの近距離まで近づいてきた彼女は、俺の胸元に手を置いた。

嫌な記憶が蘇る。

この後言われるのは……

「歯、食いしばってくださいね」

彼女の手から眩い光が生じ、焼けるような痛みが接触部分を貫く。身体は強張り、その場から下がることも出来ずに、俺は食いしばる。

「貴方を所有者だと、プラムの身体を借りノーブルが認めます」

更に痛みは強まり、手ではない固い感触が胸を押し始める。

俺は仰け反り、バランス崩して一步距離を取れた。すると不思議なことに痛みは消え、見れば胸元には複雑な文様が刺青のように、浮かび上がっていた。

そしてノーブルの手には柄が生えていた。

剣

白銀の柄。

それは傷や汚れ一つなく、触れてはならないと思えるほどに輝く。

「引き抜いてください」

何処か生気の抜けた空ろな表情でノーブルは言った。

よく見ると、彼女の手の平とのほんの少し離れた空間から柄は出ている。

手を伸ばし、掴む。

金属の冷たい感触が手の平に広がり、手が固まる。

ほとんど触れてはいけない物に触れてしまったような感覚。

「どう、したんですか」

苦しそくに息も絶え絶えの様子で尋ねてくる。

「え、ああ」

「引き抜いてください」

言われるままに柄を持った手に力を込める。

何の抵抗もなくスルスルと左右に伸びる鍔つばが現われ、それから鏡のような両刃の刀身が引き抜かれた。

ノーブルの瞳がすっと閉じられ、彼女は力を失ったかのように崩れ落ちそうになる。それをゲイツの大きな手が支えた。

引き抜かれた剣は、異様に刀身が長く左右に伸びた鍔つばの所為で、十字架のような印象を持たせる。細工は一切なく汚れや傷が全くない為に、白銀の柄と鏡のような銀の刀身が光を浴びると、眩いばかりに輝く。

「……重い」

ずっしりとした感触、両手でしっかりと持っていないと切っ先が揺れる。

(全く、先が思いやられるな)

得体の知れない声が不意に響き俺は辺りを見回すが、ゲイツに力

イそれと倒れているノーブル以外は誰もいない。

(もつと剣を身体に引き付けて、背筋を伸ばせ)
言われた通りに剣を握りなおすと、切っ先の揺れはなくなり幾分か楽になる。

「つて、誰？」

俺の疑問も周りの人間には通じていないのか、皆不思議そうにこちらを見るだけだった。

それから一拍置いて、声が響く。

(ああ、そうか俺のことか)

もう一度辺りを見回すが誰も口を開いてはいない。

(さっきまでのノーブルだよ)

思わず巫女服の少女を見るが、起きる様子は全くない。

そもそもノーブルが”俺”とか言ってた記憶がない。

(元々、俺には名前なんて無いんだ。ノーブルってのはプラムが便宜上、必要だったから付けた名前だしな)

俺の頭を置いてけぼりにして、自称ノーブルの話は続いていく。

(喋り方うんぬんに関しては、その時の所有者に何故か似てしまうからなあ。誰か分からなくなるのは仕方ないことだな)

「だから、誰だよ！」

「勇者殿はさっきから何を言ってるんじゃない？」

怪訝そうにゲイツは言った。

「え、変な声が聞こえ……」

(ああ、俺の声は所有者以外には聞こえんぞ?)

俺は押し黙り、頭の中で状況を整理し始める。

相手の言葉を全部信じるなら、さっきまでノーブルで、この声は所有者以外には聞こえてなくて。

(察しの悪い奴だな)

……心、読まれてないか?

(既に俺とお前は一心同体だからな)

きつても!

(本当に察しの悪い奴だな。剣だよ、今お前が持っているな)

.....

本当に次から次へと、理解の出来ない状態に俺は追いやられていくようだった。

作戦会議？

「この国、ミューズは地下中心部に安置されている巨大な空石からいしの力で、浮いている。

つまりこの石を持ち出すか破壊すれば、この国は浮力を失い落下する」

たんとカイが説明する。

「つまりそれを守れば良い訳か？」

俺がそう言つと、ゲイツが一度頷いてから口を開いた。

「端的に言えばそうなるじゃろうが。

相手が持ち出す気ならまだ楽なんじゃが、あんな巨大なものを持ち出すのは困難じゃからのお。

当然破壊してくるじゃろう。

そうなると相手の魔法と突撃部隊から、空石を守るために盾になるしかないからのお」

「ミューズの兵も戦つてはいると思うが、この揺れからして押されているだろつな」

ほとんど大地震と言つて差し支えない揺れが、数分おきに起きている。その所為で祭殿の白い壁には細かい輝が入り始めている。

一刻の猶予も無いような気がするのだが、カイとゲイツは真剣な表情ではあるものの、そこに焦りの色はない。

「地下中心部に行くには幾つか通路があるが、敵と味方でごつた返してると思つた方が良いな」

「そうなると空石まで行くことすら難しいのお」

二人は考え込むように沈黙し、しばしの静寂が辺りを包む。

祭殿の長椅子には眠つたように横たわる巫女服のプラムがいる。

脳裏にはノーブルの言った『彼女が生きていても思っているんですか？』と言つ言葉が流れていく。

けれど死んでいるのであろうプラムの姿は、とても死人のように

は見えなくて、俺は今にも目を醒ますんじゃないかと思っ
てしまい、目を離せなくなっていた。

床に置いた抜き身の白銀の剣は、誰かの身体を使わずに
会話することは非常に大変なことらしく、今は何も言っ
てこない。

「勇者殿も、嬢ちゃんばかり見てないで、なにかこう
良い考えをお」

慌てて俺は向き直る。

それから数秒逡巡して、言った。

「話を聞く限りだと、悔しいけど俺達に出来ることは
ないように感じるよ」

「やはり時間がかかり過ぎた」

口惜しそうにカイは拳を握る。

「じゃが、例え勇者殿が剣を手にする前に動いて地下
中心部に動いても、この少人数では戦況は変わらんじや
ろうて」

二人は押し黙り、俺は溜息を吐くように口を開いた。

「せめて此処が空の上じゃなければな」

だからと言ってミューズ王国には分が悪いだろうけれど、
国ごと地面に激突ってことにはならなかっただろう

。地上なら走っても歩いてでも何処かへ住民も含めて逃
げられる。けれど此処は空の上で……落ちれば誰も生き
残れはしないだろう。

ミューズ王国は空に有るからこそ、今まで安全だった
のかもしれない。けれど今はその空が脅威以外の何者でも
ない。

苦笑が漏れた。

「どうした」

不機嫌そうにカイが俺を睨む。

「悪い。何だかまるで空が敵のように思えて来て、変な
話だよな」

「確かにのお。正直、素直に逃げ出したいところじゃよ」

わざとおどけたように手を広げて、ゲイツは笑った。
それが気に入らなかつたのかカイが噛み付くように言葉を
投げる。

「は、逃げるたって何処に逃げるんだよ」

「そりゃ、ゲートを使って地上へ逃げるんじゃないか？」

「忘れたのか？　そこに地下中心部への通路もあるから、敵が押し寄せてるんだろ」

「まあ、そうなんじゃが」

二人は互いに溜息を吐く。

「どうやら自分たちが逃げることにすら、難しいらしい。」

「しかしゲートを使って地上へってのは本当にもうファンタジー
と言っか、なんというか……………」

「……………落ちれば良いんじゃないか？」

嘘

「落ちれば良い？」

カイが訝しげにそう言い、ゲイツは首を傾げる。

「原理は知らないけど、空石っていつので浮いてるってことは……この国は元から浮いてた訳じゃないんだろ？」

人為的なしるものなら、浮力を調節することもできるんじゃないのか？ そうすれば着陸することだってできるだろ」

此処まで言い切ったところで、二人が難色の表情を見せていることに気付く。

「元からかどうかは分かんが、ワシが生まれた頃には浮いておったぞ？」

「俺は此処の生まれだが、浮かせたなんて話は聞いたことがない。それに人為的に浮かせたものだとしても、どうやって浮力を調節するか分からない。それに海でも着水すれば、それこそ逃げ場が無くなる」

俺は拳を握りしめた。

他に何か、何かないだろうか？

時間が惜しい、こうして考えている間にも、敵は空石へと近付いているに違いない。

もし壊されれば、僕等はただ地上に叩き潰されるだけだ。

ドン！ と突き上げられるような衝撃が身体に響いた。

今までに無い、一際大きな揺れが、壁面の皴を広げていく。脆くなった天井からは細かな瓦礫が降る。

思考は空回るばかりで意味をなさず、冷や汗が背中を伝う。

「そろそろ此処も危険じゃのう」

ゲイルがそう言うと、カイは頷き横たわったままのプラムを担ぎ上げようとすると。

「きゃあ！」と悲鳴が上がった。

担ぎ上げられようとしていたプラムは悲鳴と同時に身体をばたつかせた為に、見事にカイの腕から転げ落ちた。

……はい？

「ようやく起きられましたかプラム様」

あきれ顔でカイは言うのと、彼女に手を差し伸べる。

「いったあい、なんか階段で足を踏み外す夢、見ちゃいましたよ」

「それは大変じゃったの」

ゲイルは苦笑混じりに言った。

「おい、おいおいおいおい！！！！！！」

俺は叫んだ。

「死んだとか言ってなかったか！？」

プラム以外の二人がしたり顔で口元を釣り上げる。

ああ、俺にだってもう大体のことは解る。

解っているからこそ、言わずにはいられない。

「返せよ。俺の決意の労力を返せよ」

単純に俺の反応を見る為の嘘だったのだ。

思わず床に放ったままのノーブルであった白銀の剣を睨みつける、が何の反応もない。

「あの、クラウドさん」

申し訳なさそうに俯いてプラムは俺を呼ぶ。

「なんだよ」

プラムが顔を上げる。

その頬は薄らと上気していた。

「嬉しかったです。あんなふうに想ってもらえて」

何が、と言おうとして俺は言葉を失った。

大地

揺れ、ガタガタガタという地響き、普通に立っていた自分が傾いていく異様な感覚。

慌てて自らの足をつつかえ棒にするように、床に叩きつける。

見ればゲイツもカイも同じ様に、自らの傾きを抑える様に立っていた。プラムだけが力が抜けたように座り込んでいる。

「まずいな」

「もう一刻の猶予ないようじゃの」

ゲイツとカイはそう言ってプラムへと視線を移す。

座り込んでいた彼女は大きな瞳を二度三度瞬かせると、血相を変えて走り出した。

「プラム！」

訳も分からないまま、ただ彼女の行動が危険に感じて叫んだ。

ほとんど条件反射で後を追う。

妙な違和感、まっすぐ走っている筈なのに、身体がフラつく。

……

解ってる。

今の状況がどんなものか、なんとなく解ってる。

でも、そうであって欲しくない。

教会を飛び出すプラムに続く。

真っ先に見えるのは炎に包まれ始めた城だけでも、彼女はそんなものには見向きもせず立ち止り、そして見上げた。

俺も見上げる。

そこには幾つかの大きな浮島が、俺達よりも高い所に在った。

「な、んで？」

震えた声に振り向く。

プラムは雲の白と空の青しかない、この浮島の周りを見渡している。

嫌ってほど心臓が脈打って、息が苦しい。

たどたどしい足取りで、この浮島の端へとプラムは歩いて行く。揺れる。ガタガタ、ガタガタと地震のように大地が揺れる。

けれど、この空に浮いている土地に、地脈なんてものは無い。

だからこの揺れは地震じゃない。

プラムが端へと着いた。

遠目からでも彼女の肩が震えているのが分かる。だから俺はプラムに近寄って、同じものを見た。

言葉など出なかった。

視界一面に広がる色彩豊かな緑と、その合間を覗く土色、そしてそれらを横断する青い水の流れる大陸の巨大さに、俺もプラムも圧倒されたのだ。

そして次に恐怖した。

この巨大な大陸に自分達が落ちることを。

行動開始と忘れ物

「……助けて」

それはプラムの酷く弱々しい声、否応なしに頭の芯を揺さぶった。辺りには焦げ臭い熱風が流れていく。

隣で座り込んでいたプラムが振り向き、言った。

「お願い助けて、クラウド」

子供みたいに顔をクシャクシャにして、それしか知らないかのよううに。

「お願いだから」

プラムは俺の服の裾を両手でギュツと掴み、祈るようにうつむく。布切れ一枚の厚さを彼女の手の温もりが越えてくる。流れたての涙が染み込み、その熱さに思わず俺は彼女を抱き締めようと腕を伸ばしたが、出来なかった。

任せろ、大丈夫、そんな安心させられるような言葉など、自信を持って俺は言えない。そもそもプラムを安心させる自信なんて俺には無い。

「プラム」

俺は服を掴んだままの彼女の手を握り締め、指の一つ一つをゆっくりと解いていく。頬に涙の伝う不安そうな顔で彼女は俺を見つめていた。

「行ってくる」

プラムの表情から困惑の色は消えないけれど、それでいい。彼女に背を向け俺は燃え盛る城の方へと走り出した。

後方で男女の制止の声が聞こえたが、無視した。

燃え盛る城内、白かった内壁は黒ずみ天井を黒煙が渦巻く。炎は揺らめいてひび割れた壁に映る影を躍らせ、その熱は肌がヒリヒ

りと痛むほどに熱い。全身からは汗が吹き出し、息はだんだんと苦しくなる。

このミューズ王国は空に浮いている。それは空石という物の力によるものだ。

ならば、それはこの国の中心の下の方におそらくは安置されている。つまりはこの国の中心である城の下に有る可能性が高い。またそんな重要施設に直接行ける道のある可能性も少なからずある筈だ。例えばそれは王の寝室や玉座の裏など、重要人物の良くいる場所に緊急時のことを考えれば存在しているだろう。しかし重要ゆえに見付かりづらいうえ、現状それを探し回っている時間があるとも思えない。

だから方法は一つ。

そう自分が今からすべき行動に思考を巡らせていると、前方の煙の中に人影浮かび上がった。

慌てて俺は剣を構えようとして、自分自身の状態を見つめた。

(置いてきたああああ!!!)

人影は細くひよる長い。それは近づいてきている所為か大きくなっていく。

両側は壁があり、逃げるのなら来た道に戻るしかない。けれど、そんな非効率な回り道などしている時間はない。

瞳を閉じる。それからゆっくりと息を吸い込んで吐き出す。むせ返るほどの煙たさの中、息を落ちつけていく。

人影が煙の中を抜け、その姿をさらした。

褐色の肌に大きな爪と淀んだ赤色の大きな瞳、口元には大きな牙を覗かせている。身長は二メートルを越え、身体には真新しいぼろきれを纏っている。それは何故か人間の体のパーツをアンバランスに組み合わせた化物のように思えた。

(全く己の武器すら忘れ、戦いに行く奴が主なんて困ったものだ)
突然頭にその声は響いた。

(しかしまあ、ようやく何をするか決まったようだな)

はは、離れていても喋れるとは思わなかったよ。

(覚えの悪い奴だな。言つたる既に俺とお前は一心同体だと)
炎の廻り始めた廊下に酷く聞き取りづらい言葉が流れる。

「マダイキノコリガイタカ」

ゆづゆづとした足取りで化物は俺との数メートルの距離を縮めてくる。重い足音を立て、牙の覗く口元を引き攣らせながら、力を貸せ。

(元より俺はお前の力だ。だから名を呼べ)

俺は息を吸い、その名を吐き出す。

「……………」

(どうした?)

名前なんだっけ? そもそも決めてあつたっけ?

(……………)

既に化物との距離は無くなっていた。

ゆづくりとした緩慢な動作で人の胴体はあろうかという腕を化物は振り上げていく。俺はそれを見上げ、危機感にさいなまれた身体は一歩足を後退させ、両手を頭上に構えさせた。

ただでさえ引き攣っていた化物の口元が、よりいっそう引き攣る。

(何でも良い! さっさと呼べ!)

視界を奪うかのように巨大な腕が落ちてくる中、俺は呟いた。

「ノーブル」

行動開始と忘れ物（後書き）

ずいぶん久しぶりの投稿になります。

もし続きを気になっていた読者様いらっしゃいましたら……すみませんでした。

これからちよこちよこ進めていくつもりですが、気長に見て頂けると助かります。

手応え無き切味

一瞬の空白、自分の肌を強い熱風が通り抜けた。
いつの間にか手の平には冷たく硬質な感触が有り、視界は淀んだ
赤色の瞳を捉えている。

ドサっという重量感のある音が後方で響き、慌てて俺は振り向いた。
刃物のような爪を生やした、大きな手が落ちていた。

それはつい先ほどまで、自分の視界を覆い尽くしながら、振り下ろ
されようとしていたものではなかっただろうか？
妙な感覚だった。

低く苦しげなうめき声に俺は正面に向き直る。

化物が片膝を付き自らの片腕を抑え、身体を小刻みに震わせてい
る。その抑えられている腕は肘から先の部分がぶつとりと無くなっ
ていて、恐らくは血であるう黒い液体が流れ落ちていた。

(ギリギリだったな)

ほっと一息付くような声が頭に響き、俺は自らの手が握り締めて
いる白銀の剣へと視線を移す。

傷一つ汚れ一つない刀身が揺らめく炎の光に乱反射し、神々しい
とさえ思えるほどの輝きを放っている。まるで、それは今しがた化
物の腕を切ったとはとても思えない。

そもそもこの剣が切ったのだろうか？ 当事者である自分自身で
すら切ったという実感を持ってない。何せ感触は愚か何一つ伝わって
こなかったのだから。

(さあて、こいつを倒して先に進もうか)

脳に響く声は何事も無かったかのように、言った。

腕を抑えていた化物がこちらに顔を上げる。その口元はもう引き
攣ってはいない。血走った瞳が俺を捉えた。

確かな敵意に背中に怖気が走り、重量に流されるままだらりと下
がっていた剣の切っ先を、柄を両手で持ち直して上げる。けれど、

切っ先は安定せず不安定に揺れていた。

（お前は切っ先を相手に向けることだけ考えろ。今はそれで良い）
言われるがまま切っ先が安定するように身体に力を込める。ほんのわずかな時間で震えが消え、思わず安堵のため息が漏れる。

（来るぞ）

「え？」

見れば隻腕の腕を振り上げた化物が突進するかのような勢いで目前に迫っている。

化物が言葉にならない咆哮ほろいっを上げた。

その大声にビクッと俺の肩は上がって思考が飛び、避ける動作や剣を振る動作をする間が消えた。

だから俺に出来たのは突き出された化物の腕に剣の切っ先を当てることだけだった。

刹那、化物の腕が裂けた。

何の抵抗もなく、まるで勝手に裂けていくように切れた。

現実感なんて欠片もない。馬鹿げた切れ味に俺はただ目を丸くすることしかできない。

化物が呻いた。

「ナンダ……ナンダコレハ」

（切れ！）

ハッと我に返って、俺は力任せに困惑したまま動けない化物に剣を振り下ろした。

なめらかに刃は化物の肩口に食い込み、そして俺に何の手応えも感じさせないまま、両断した。

黒い血しぶきが俺に降り注いだ。

倒れ伏した化物はもうピクリとも動かない。

恐怖から解放された身体が酸素を求めて、荒く激しい呼吸を開始する。

（大丈夫か？）

「……なんとか」

煙たい空気に咳き込みそうになりながらも、息を整えていく。ふつと頬伝う感触に気付いて、それを拭った。

真黒な液体が手にこびり付いていた。

見れば、その黒い液体は身体の至る所に付いていて、俺は思わず顔をしかめてしまう。

（次が来るぞ）

前方の煙には黒い影が映っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3570i/>

突然のファンタジー

2010年12月31日12時55分発行